

人材育成・男女共同参画委員会、刊行委員会、JJAP 編集運営委員会共同企画シンポジウム 「学会における若手人材育成 一応物があなたのキャリアデザインを応援します—」報告

中央大学	庄司 一郎
慶應大学	石樽 崇明
電気通信大学	中村 淳
日本女子大学	小館香椎子
東京工業大学	岩本 光正
名古屋大学	河野 明廣

秋季学術講演会において、シンポジウム「学会における若手人材育成 一応物があなたのキャリアデザインを応援します—」を開催した(2008年9月4日(木) 13:00~17:00; 参加者数160名)¹⁾。

応用物理学会ではこれまでに、若手人材の育成という観点からさまざまな活動を行ってきた。特に、人材育成・男女共同参画委員会が中心となり、毎年秋の学術講演会におけるインフォーマルミーティングの開催²⁾、春・秋の学術講演会での託児室設置³⁾、キャリアエクスプローラー(CE)マーク/イラストの運用⁴⁾など、若手支援のための環境づくりを着実に進めてきている。しかし、学会ができることはまだまだあるのではないだろうか、特に、もっと直接的に若手をサポートするために、学会は何ができるだろうか — このようなことを議論し、その具体的な取り組みを模索することが、本シンポジウムを企画した目的である。

本シンポジウムではメインのプログラムをセッション1とセッション2の2部構成とした。セッション1では、若手のキャリア形成に役立つと考えられるチュートリアル形式の講演会を、高い見識をお持ちの講師陣を迎えて行い、セッション2では、「学術講演会における若手へのサポート」をテーマとするパネルディスカッションを行った。

まず、石原宏会長が挨拶の中で、学会という場においても人材育成がますます重要になってきていることを指摘され、その中で、人材育成・男女共同参画委員会が果たしている役割は大きいと強調された。続いて、人材育成・男女共同参画委員会の小館香椎子委員長から、委員会の設立経緯とこれまで行ってきた活動について概略が紹介された。

本シンポジウムの趣旨について、本稿の冒頭に記した内容を庄司(筆者)が説明した後、セッション1に入った。まず初めに、ソニー技術戦略部の石川貴久枝氏より、異分野間で円滑なコミュニケーションを図るコツについてご講演いただいた。イノベーターにとって異分野コミュニケーションがいかに重要であるか、そして、コミュニケーション能力を高めるコツは、「質問力」、「心活力」、「体感力」の3つの力を身につけることであることを、大変わかりやすく説得力を持って説明された。

お茶の水女子大の塩満典子氏は、科学技術政策の企画・立案・審査にも深く関わってこられたご経験を踏まえ、説得力のある申請書・プロポーザルの書き方のノウハウについてお話いただいた。研究費の申請書を書くにあたっては、第一に明確なビジョンを持つこと、また、自分自身がイノベーターとなって、自由な発想でクリエイティブな提案をし続けることが大切であるとのことであった。

次の講演は、明治大のマーク・ピーターセン氏による、英語論文ブラッシュアップ講座であった。日本人研究者が書いた英語論文を数多く添削されてこられたご経験に基づき、日本人が陥りやすい問題、犯しやすい誤りにポイントを絞り、具体的な例文を挙げながら解説していただいた。盛りだくさんの内容を随所にユーモアを交えながらお話され、若手ばかりでなく参加していた誰もが興味深くなさずきながら聴き入っていた。

セッション1の最後は、2007年度APEX/JJAP編集運営委員長を務められていた東大の中野義昭氏に、学会誌APEXの紹介と、論文を投稿するうえでの心構えについてお話いただいた。投稿する際に心がける点として、論文の先駆性・主体性・普遍性・公益性・科学的公正を挙げられた。また、参考文献で引用する論文数をもっと増やすべきであるとのことであった。

引き続き行われたセッション2のパネルディスカッションでは、まず3名のパネリストがそれぞれ、若手をサポートするための具体的な取り組みについて紹介していただいた。日大の田中倫子氏からは、CEマークの導入の経

緯と現状および課題について報告があった。今後さらに利用件数を増やすために、求職・求人側双方に対し CE マークの認知度を上げるべく広報を続ける必要があること、また、学術講演会以外でも CE マークを利用できるようにしてはどうかとの提言があった。名大の河野廉氏からは、2006年に名大に設置されたキャリアパス支援室の取り組みについて説明があった。特徴は、研究・開発職以外のノン・リサーチキャリアパス支援に重点を置いていること、他大学の学生・ポスドクも登録可能で、専門チューターとの個別相談が受けられること等が挙げられる。最後に、人材育成・男女共同参画委員会の社会貢献部門 (APSG) 幹事長の木村忠正氏 (電通大) より、APSG の活動理念について説明があった。特に、学会における若手支援としては、APSG のメンバーがセカンドメンターとしての役割を担えるのではないかと指摘された。

その後のディスカッションは時間の制約上議論を尽くすことは残念ながらできなかったが、ポスドク問題に関する意見交換が最も多く、メンタリング制度の重要性や、相談の場を学会が提供することの意義の大きさ、このような活動が続けることがポスドクに対する認識を変える大きな流れにつながるのではといった意見が出された。

応用物理学会では今後も若手の人材育成について何ができるかを模索し、さまざまな取り組みを行っていきたいと考えている。会員の皆様から引き続きご理解とご協力をいただければ幸いである。

- 1) http://www.jsap.or.jp/activities/gender/2008autumn_symposium.html
- 2) <http://www.jsap.or.jp/activities/gender/>
- 3) <http://www.jsap.or.jp/activities/gender/takuji/>
- 4) <http://www.jsap.or.jp/activities/annualmeetings/CEmark.html>